

平成 29 年度

事業所名：介護予防施設 西光荘

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0392500021		
法人名	株式会社 金ヶ崎福祉フロンティア		
事業所名	介護予防施設 西光荘		
所在地	岩手県胆沢郡金ヶ崎町西根和光544-2		
自己評価作成日	平成29年6月19日	評価結果市町村受理日	平成30年1月9日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou_detail_2016_022_kani=true&JigyosyoCd=0392500021-00&PrefCd=03&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわての保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通二丁目4番16号 やまのえんビル1階
訪問調査日	平成29年6月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

晴れた日は、岩手山が望めるほど周りの景色が良く、春には桜など、四季を感じながらゆったりと過ごせ、アットホームな雰囲気です。天然温泉にも浸かれる環境で生活できます。日々の生活に行事を取り入れ、楽しみのある生活を送って頂けるようにしています。 利用者様の意思を尊重して、利用者様のペースに合った環境で過ごせるように支援しています。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

併設の小規模多機能型居宅介護支援事業所と町民憩いの温泉施設「駒子の湯」を同一会社が運営し開設10年を経過した。酪農家の点在する広大な牧草地に囲まれ、温泉入浴、介護予防「ゆったりサロン」参加町民、多様なボランティアとの訪問交流を行いながら「安心・笑い・意思の尊重」がキーワードの介護理念を掲げてチームワークで心ひとつを目指した支援に努めている。運営推進委員会は利用者の表情、防災や環境、職員処遇と活発な話し合いがなされ家族や地域住民の信頼、利用者の安心、職員の意欲の向上に活かされている。特に夜間の災害、終末期の不安に備え関係機関や団体との更なる連携と対策を検討している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

[評価機関:特定非営利活動法人 いわての保健福祉支援研究会]

平成 29 年度

事業所名 : 介護予防施設 西光荘

2 自己評価および外部評価結果

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝の申し送り後、基本理念・介護理念を唱和し、意識を高め共有しながら実践に繋げるようにしている。また、毎月実践しやすい目標を立て取り組んでいる。	「安心・笑い・意思の尊重」がキーワードの介護理念を毎朝唱和し、笑顔・意思表示場面の振り返りをし再確認しながら実践に繋げている。4月から「個々のやれること、持てる力を見極め引き出し、持続できるように支援する」を目標に定めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	小学生の福祉施設体験や中学生の職場体験を受け入れている。昨年よりボランティアスクールを受け入れ今年も継続している。	隣接する駒子の湯利用者や小中学生の訪問、職場体験、ボランティアの慰問とホームを訪れる人が多く活気をもたらしている。ホームの夏祭りでは近隣住民に呼びかけ交流しているが近年こちらから出かける機会が少なくなってきたとしている。	広大な牧草地帯で隣家とも離れており日常的交流の機会は限られているが、災害時等助けあいも必要としており、集落行事参加や話し合いで更に近隣住民との交流をより深めることを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	温泉を利用した『貯筋講座』と『湯ったりサロン』という介護予防事業に取り組み、コミュニケーションを行う事で地域に貢献している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回の開催。会議のメンバーには行事に参加してもらい、利用者・職員・施設の様子を見てもらっている。グループホームの利用者も1名会議に参加している。利用者自身の発言は少ないが、事前に話を聞いて会議の内容に活かすようにしている。	併設の小規模多機能事業所と合同開催している。家族・利用者も参加する避難訓練や行事と組み合わせた開催を工夫し、運営状況の報告、情報交換をしながら活発に意見提言を得ている。在宅介護者のための排泄ケア研修の開催などに繋げている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域包括ケア会議等の会議に出席し、地域で抱える問題点の解消に繋がるようにしている。	運営推進会議には町職員が、地域包括ケア会議にはホーム職員が毎回参加し積極的に相互に情報交換できている。介護予防の貯筋講座を町の委託を受けて開催している。診療所・保健・介護関係職員とも話しやすい関係にある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	誘導的な言い方にし、ダメです等本人の意志を制止する様な言い方はしない様になっている。拘束は必要な場合に限り、家族に説明し同意を得てから行うようにしている。	介護力向上委員会が中心になり、身体拘束の弊害、事故の未然防止、ヒヤリハットの検証などミーティングや内部研修を開催し、スピーチロックも含めた拘束のない支援に取り組んでいる。特に夜間はマットや補助具を活用し転倒防止と利用者の安全に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	玄関の施錠以外は物的拘束は行われていない。入浴時や排泄時に身体観察を行うなどして職員間で常に意識し、確認する事で予防に努めている。		

[評価機関 : 特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護を利用されていた利用者様がいたので、言葉として知っているが、実際に制度がどのようなものなのかよく理解していない職員もいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は職員2人で対応し、説明に同意を得られるようにしている。こちらから一方的に話をするという形は取らないように気を付けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	行事の後に家族懇談会を開いたり、意見や要望を頂いてサービス向上に努めている。また、送迎時や連絡帳で家族からの声を聞くこともある。	居室担当者が利用者の生活状況をまとめ、広報紙とともに毎月家族に郵送している。電話や行事参加後の懇談、面会時に広報内容も話題にしながら要望や意見を聞いている。季節感のある服装をとの要望や終末期の心配も寄せられ話し合いながら反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月2回のミーティングで意見交換を行ったり、社長との個人面談の機会を設け、アンケートをもとに意見を述べている。	ミーティングや職員連絡簿、職員アンケートや管理者との個人面談を通じて意見提言を聞き会議で検討し運営に反映させている。例えば体位の安定保持に肘付椅子の導入、生活の質を高めるため行事やゲームの工夫で笑いや活気のある暮らしの実現に努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年度末手当や基本給料の金額増額に取り組んでいる。各自やりがいを持って仕事をしているが、時間外になってしまうことが課題となっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	参加したい研修のアンケートをとり、それをもとに研修や、役職や経験年数によって受講してもらう研修等を検討している。外部研修にも参加できるように配慮している。また内部研修の際は時間外手当が支給される。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホームの交換研修や、他の施設の職員との交流を図り、お互いの施設のいいところを学び実践できないか話し合っている。		

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	時間がある時などに、本人の話に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努め、本人の健康状態や生活上の問題となる事や要望をアセスメントしている。また、施設見学や体験利用に来て頂き、理解するように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用前に家族に見学に来て頂いたり、利用者本人は体験利用を行って施設のことを知ってもらっている。家族や本人から話を聞き出せるような雰囲気作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者様の状況を聞き取り、今必要なサービスがどのような事か見極め、利用できるようにしている。なんでも介助するのではなく、利用者それぞれのペースに合わせて行えるように見守っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	洗濯物たたみ、テーブル拭き、下膳などできることを手伝って頂いている。様々な年齢の職員がいる事で家族のような接し方を行うこともある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月、家族に生活状況をお伝えしている。また、夜以外で面会日時に制限をかけずいつでもいらして頂けるようにし、ご来荘された際には居室でゆっくりと話せるように配慮している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないう、支援に努めている	地区の敬老会や町民文化祭を通して、地域の繋がりが途切れないようにしている。	利用者の地元地区の敬老会参加や町文化祭の見学、近隣花卉センター界隈へのドライブ、スーパーへの買い物同行と馴染みの場所や知人・親戚に会えるよう機会をみて支援している。時に併設小規模多機能の利用者と懐かしみの対面をしている利用者もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	席替えを行い全員の顔が見えるようにして大家族で食事をしているような環境を作った。利用者が自身の家族の食事介助をしていたり、他の利用者の食事介助もして頂く場面が何度もある。寄り添って生活していける環境作りをこれからもしていきたい。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設入所によるサービス利用終了がほとんどだが、利用が終了してもお手紙をくださる家族もいる。必要に応じて連絡を取り相談や支援を行っている。		

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入浴時のリラックスしている時や、日常の何気ない会話から思いや希望、意向の把握に努めている。本人に聞くのが難しい場合は、家族に聞いたりしている。	日々の関わりの中で会話やつぶやき、気づき、表情を大切に申し送りノートに記録し共有している。雁月が食べたい、家に帰りたいなどもあり、思いの実現に向けてミーティングで話し合い、家族とも相談しながら希望に添えるように努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族から趣味や興味のあるものを聞き、情報を収集するようにしている。また、利用者との日々の会話の中から生活歴や好みの物等を聞き、情報を得るように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の関わり合いや、バイタルチェック等で個々の心身の状態の把握に努め、申し送りやミーティング等で情報を共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者が快適で楽しく、穏やかに過ごして頂けるように、皆でレクリエーションをしたり、本人や家族の意見や思いを聞き、コミュニケーションを取れるように考えている。	介護支援記録や申し送りノート、家族の意向を居室担当者が中心になりまとめ、会議で話し合いながら計画作成担当者が作成している。特技や興味、出来ることを大切に笑顔の広がる計画を目指している。状況変化に応じその都度見直しをしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	申し送り時に気付いた事や変化があった事等を細かく、すぐに情報共有している。朝夕の申し送りだけではなく、ノートを活用した情報の共有もしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	日常生活支援事業の利用、訪問診療の利用、床屋、クリーニングの訪問等、ニーズ発生時に随時対応を検討している。訪問診療を利用していなかった利用者が、状況に応じて訪問診療を利用するようになった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括ケア会議等を通し、利用者に合う利用ができるように支援している。移動図書館も活用して、利用者と一緒に本やDVDを選んでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は家族にお願いしているが、受診の援助も行っている。現在、月に一度訪問診療を利用しており、体調に変化があった場合は、相談しながら支援している。	近年協力医の訪問診療利用者が多くなっている。また専門科のかかりつけ医受診は家族対応としているが職員が支援する機会もある。健康管理記録をもとに看護師の指導を得ながら家族、協力医、関係医療機関と連絡を密にし適切な受診に繋げている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の些細な事でも看護師に報告し、指示を仰ぎ、連携をとっている。看護師は利用者の状態観察に努め、適切な対応・指示が出来るように努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際には面会や家族から様子を伺い、病状の経過・状態を把握して利用再開時に混乱がなくスムーズにできるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族・本人に意思を確認し、できるだけ要望に添えるよう、かかりつけ医・協力医と当事業所で話し合い、対応可能な機関へスムーズに移行出来るよう支援している。また、家族の心のケアにも努めている。	重度化・終末期対応は現状では困難なことを伝え医療機関や関係事業所への連携をもとに対応している。緊急時に備え、かかりつけ医や家族の協力を前提に重度化した場合や看取り指針を作成し職員の心構えや介護支援知識の研鑽に取り組んでいる。	重度化終末期対応の家族の不安に応えるべく職員の心構えや介護力の向上を目標達成計画に定めDVD鑑賞等による研修を計画している。更に医療や関係機関との連携の下に知識を貯え介護力を研鑽し利用者家族の安心に活かされるよう期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	内部研修や、ミーティングなどで嘔吐した場合などの対応を繰り返し行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災委員会を中心に、最低でも年2回の避難訓練を利用者と一緒に実施している。地域住民を巻き込んだ訓練も計画当中である。	隣接する駒子の湯、併設小規模多機能事業所合同で消防署立会いおよび運営推進委員の協力の下、年2回火災想定避難訓練を行っている。ホーム独自の訓練も重ねているが夜間災害発生時の避難に不安を抱え、地域住民の訓練参加協力を計画している。	計画を実践に繋げ、特に冬期間や夜間も想定した住民参加による訓練を通じて通報、避難経路等再確認し、フローチャート、マニュアルを見直しながら災害に備えることを期待したい。

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	排泄時・入浴時に配慮するのは勿論の事だが、利用者は人生の先輩で敬うべきという事を常に意識し、命令口調や大声にならないように努め、利用者の人格を損ねない言葉かけをしている。	一人ひとりの生活歴を尊重した話題、人生の先輩としての言葉づかいに留意しながら、着替えや入浴、排泄支援時の羞恥心への配慮、周囲への気配りなどを心がけて対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	会話の中や、テレビを見ている時などに「〇〇が食べたい」「〇〇に行ってみたい」と話すことがあるので、できるだけ対応できるよう心がけている。「草取りに行きたい」と話す利用者もいるので、一緒に付き添い、行う場合もある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	施設の一日の流れはあるが、そればかりに捉われずに、利用者がしたいと思った事はその時にできるような、柔軟な対応ができるように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	着る服は一緒に選ぶ。好みを聞き入れ購入したり、家族から持って来て頂いたり、家族が夏物・冬物の入れ替えや購入も協力して頂いている。 床屋のペースも自己決定できる方は本人に合わせる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事作りを眺めている利用者がいるので、味見をお願いすると「ニコッ」と笑ってもらえる。食事後の下膳もしていただく事もある。また、干し柿と一緒に作り、おやつに出すと「美味しい」と喜んで食べてくれた。	給食委員会を中心に好みや季節感、ソフト食など食事形態にも配慮した献立を作成し職員が交代で調理している。利用者は味見や茶碗洗い、後片付けを手伝うこともある。差入れの山野菜や庭先の苺、行事食やおやつは食卓に彩りと変化を添えている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人一人の好みや状態に応じ、食べやすい形にしたり器を変えたりしている。水分量は、十分な水分が摂れるように常に意識をしながらチェックを行っている。日により、様子を見てトロミの量も変えている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアで口腔内や義歯の状態を観察したのち、洗浄を行っている。歯磨きが利用者に伝わらない時は、職員が歯磨きしているところを見てもらい、言葉以外でも伝えるようにしている。口腔ケアの研修にも参加し、口腔ケアの重要性を職員に認識してもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者一人一人の排泄パターンに合わせ排泄用品を使い分けている。チェック表・排泄パターン・しぐさにより声掛け・トイレ誘導を行い、おむつ使用の方でもトイレへ座ってもらったり、尿器を使用したりと本来の自然な形で排泄を促している。	リハビリパンツ利用者が多いが、トイレで自力排泄ができることを目指し、排泄記録を参考にしながら、利用者への目配り、声掛けによるトイレ誘導で失敗のない排泄支援に努めている。夜間のみポータブルトイレ、尿器を補助的に使用している利用者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳やヨーグルトだけでなく、野菜ジュース等も提供している。一日の水分摂取量に注意し、歩く事、ドライブに出かける事も積極的に行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	完全個別で天然温泉に入ってもらっている。入浴は午前だが、個々の状態に応じて午後に入浴したり、小規模の大浴場で一緒に入浴することもある。	浴槽は個浴で天然温泉、体調や気分に配慮しながら声がけしており、週2回から3回の入浴頻度となっている。車椅子利用者は併設事業所の広い浴室を利用している。時には唄や会話を楽しみながら湯治気分に入浴している仲間もいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	眠くなった時に居室に入ってもらえるようにしている。眠れないような時は、温かい飲み物を提供したり、状況に応じて畳やソファ、ホールのベッドで休んでもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	症状の変化を確認し、訪問診療時に相談することもある。便秘薬や睡眠薬など、本来ならば使用しなくても良い薬に関しては、看護師や担当医と相談の上、減薬している。服薬間違いが絶対にならないよう、確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	テーブル拭きや洗濯物たたみなど、利用者のできることを行ってもらう。歌が好きな利用者がいるので、民謡や若い時に聞いていた曲を流すと思い出話を教えてくれる利用者もいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	面会時に家族と外出したり、天気の良い日は外へ出て施設の周りを散歩している。草取りやいちご摘みなどを日光浴も兼ねて行い、また、季節を感じてもらうため、ドライブに行くこともある。	初夏や初秋にはドライブ、散歩に出かける機会づくりに力を入れ、天気の良い日は涼風や陽光にあたり、気分転換を兼ねた日常の散歩や外出を促している。ざぜん草や菜の花見物、紅葉狩り、産直ツアーとドライブに出かけしており、家族と買い物に出かける利用者もいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自己管理が可能な利用者はお金を所持している。職員が付き添い、併設の温泉の売店や移動販売で買い物をし、必要に応じて支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があった場合支援している。家族から手紙が届いたりする事もある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感を感じられるように、利用者や職員が持ち寄った草花を飾っている。また、七夕飾りやクリスマス、正月等の行事の写真や、利用者が創作した作品の展示もしている。	畳敷き小上がりの間続きの広いリビングに置かれたテーブルを中心に所々にソファやベンチを配置、花菖蒲や小学生からの手紙、行事の写真が飾られ、古いタンスが懐かしく落ち着いた雰囲気を出している。洗面・トイレや浴室も衛生的、機能的に整理され使い心地よく工夫されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者の居室にもベッド以外に畳スペースやソファなどを置き、くつろげるようにしている。食事の席や配置なども工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の写真や本人が作った作品、職員が描いた利用者の似顔絵等、なじみのあるものや愛着のあるものを飾っている。また、自宅で使っていた寝具を利用している。	利用者の生活動作の状況や在宅時の習慣、愛着ある身の回り用品を大切に、ベッドの配置、衣類の管理、写真や絵、ぬいぐるみの飾り位置など利用者・家族と相談しながら居心地よく過ごせるように工夫している。レクリエーション・ゲームで敢闘した賞状が張られており訪問面会時の話題で意欲喚起に繋げている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人一人のできることを把握し、トイレ等の場所をわかりやすく表示するよう努めている。 施設全体がバリアフリーなので、移動しやすい作りになっている。		